

「大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成」プロジェクト

インタビューシリーズ第11回：生活環境学部 松岡悦子先生

松岡先生のご専門は文化人類学、ジェンダー論。特にリプロダクション（妊娠・出産）の比較研究がご専門です。海外でのご研究体験も豊富で、本学においでになる以前は旭川医科大学で教養教育をご担当でした。それらの多彩なご経験から、奈良女子大学の学生の学びについて、どのように見ておられるか、伺いたいと考えました。



■ 教養教育で世界が広がる

——松岡先生は学部も大学院も阪大でいらっしゃいますね。学生時代、教養教育にどんな思い出がありますか。

「教養の先生の中に特色のある先生がおられて、西洋史の授業とか、教養の名物といわれるような授業は面白かったですね。何百人も受講生がいて舞台の上でやっているような授業でしたから、教壇を歩き回って話をする先生とか、ヨーロッパで体験してきた話とか面白かったし、教職もとっていましたが、スプートニク・ショックの話とか、高校の時までは知らなかったような話を大学で聴いて世界が広がっていくという感じで。もともと、ほとんどの時間は山登りの部活で時間をつぶしていましたけど。」

——かつての京大だと教養パラダイスといわれて名物教授もいて、学生は野放し状態という感じがありましたが、阪大はいかがでしたか。

「阪大も同じだと思います。教養の授業で苦労することはなかったですから、単位をとりやすい授業を受けるとか、楽しく単位をとろうとか考えもしなかったし、好きなものをとるといって自由でやっていました。野放しには違いありませんね。」

——文化人類学のご専門の学生時代の勉強と教養でのつながりとか、役に立ったこととかはありますか？

「教養部で自分の好きなものを見つけて専門に進んだという人にとったら、つながっているかもしれませんが、私の場合、直接のつながりはなかったと思います。でも、自分の中で教養は役に立たなかったとは思いません。それぞれ教養があって、それが自分の中に入っていて、その上に専門ができてくるという感じかもしれないですから。」

■ イギリスの大学の多様性

——海外でのご研究された経験もおありですね。同じ文化人類学でも国によって、大学の制度によって学問のキャラクターが変わるといえることはありますか。

「文化人類学はアメリカ的な呼び方で、ヨーロッパは民族学（エスノロジー）ですね。日本での学会の名称も、かつての日本民族学会から文化人類学会に変わったんです。やり方も確かに違いはあると思いますね。」

——大学のあり方にも違いがあるかと？

「イギリスの大学にはオナラリー・リサーチフェローで1年間いたんですけど、アメリカの大学には留学してないので、よくわからないですね。文化人類学という学問は特に植民地の問題を引きずっているもので、イギリスではそれを感じました。たとえばイギリスの大学は、かつての植民地の学生は安いお金で入学できますが、日本人だと莫大なお金がかかるとか。」

——イギリスはカレッジがありますね。

「あちこちで研究会があって、恵まれているといえは恵まれています、しんどいといえはしんどい。それから、イギリスの大学は多様な学生が学んでいました。年齢の高い学生も。そういう点では面白いところがありました。」

■ 「役に立つ」教育を求められる医大

——3年半前に奈良女に来られるまでは医大におられて、ずいぶん性格の違う大学から来られたわけですけど、奈良女の学生の印象はいかがですか。

「とっても礼儀正しくて行儀がよくて、しっかりした家

庭で育っている感じで驚きました。医学部の学生は偏差値はある程度高いかもしれないですけど、人文社会系の教養科目は必要ないと思っているから、まともに聴かない。こっちが一生懸命授業をしようとする、その方が間違っていると堂々と言ってくるから。教育大学から来られた先生なんかは、初日に怒って帰ってしまったことがありましたね。」

——医者には幅広い人間的な素養が必要だと一般には言われますが、医学部教育は、そうはなっていないと？

「そうですね。ちょっとビデオの操作に手間取ったりすると、医学部だったら「ちゃんと準備をしていないような授業はするな」と平気でいいますし、アンケートをとると「こんな授業必要ない」とか「役に立たない」とか、あたりまえに書かれるし。医学部は看護と一緒に授業していましたから最大で160人くらいの大人数で授業しないとイケない。奈良女だと専門に入ると1クラス30～40人ですよ。学生が真剣に聴いてくれますし、優しいから、こちらの方が鍛えられない点はあるなと思いますけどね。それに甘えてしまうと、だめなんでしょうけど、医学部のような厳しさは授業で求められないですね。

それから、語学教育にあまり力を入れてないのには驚きましたね。学生の英語能力があまり高くない。素地はいいから教養の時に鍛えたら鍛えられると思うんですけど、鍛えられずにきている。語学の先生たちも風当たりがきつくないんでしょうね。医学部の一般教育はかなり厳しい目で見られていたから、それなりにしっかりやらなければ、科目を廃止されるというような危機感があって、やらざるをえないところがありました。」

——それは仕方なくという感じですか？

「望んで、というわけではないけれど。ドイツ語は厳しい目に遭いましたね。必修としてなくなっちゃったので、ドイツ語の先生は、医師・患者関係とかコミュニケーション論を教える。自分の科目として一つか二つはドイツ語を残しますが、他の科目に転じていくというふうで、かなりきつかったと思います。私は医療人類学、医療社会学と変えていけるので、そんなに大変ではなかったですけど。生命倫理が必須のコア科目に入ったから生命倫理を教えるようになりました。これから大学として学生を育てていく以上、学生に役に立つような教育をしていかざるをえないというのはありましたね。」

■ 少人数教育の可能性

——教養教育をどうするかについて医学部全体で議論はあったんですか？

「ありましたね。初期教育、入ってすぐの教育をどうするか。PBL (Problem Based Learning) を始めて、学生を少人数に分けて自学自習、プレゼン能力を養うためのチュートリアル授業に転換しました。途中から、そういう少人数教育をやりましたね。」

——教養教育の先生が手分けして？

「実際には教養の教員の人数は12～13人だったので、それだけでは足りない。学生に一人チューターをつけるので15のグループに分けて、臨床医学の若い助教の先生が回り持ちでチューターに入ってやりました。奈良女でもやってもいいのかもしれないと思います。ただ、人手はかかりますね。」

——ちゃんと教育しようと思ったら少人数で手をかけることが必要になってくるので、それを教養教育の位置づけで、できないかな、と考えてはいるんですけど。

「確かに奈良女の強みは少人数教育ができることです。ただ、実際は就活が3年後半から始まってしまいうから、せつかく専門に入って少人数教育で鍛えられる時に骨抜きにされる感があります。だから教養で鍛えるようにしないと時間が足りない、もったいないですよ。」

——そういう点では教養の中でこそ少人数教育が必要かもしれないですね。

「教養科目に昨年度から小山俊輔先生の国際関係の授業ができて、ようやくアップデートしたような感じがしました。いま「地域の暮らしとグローバル社会」という科目を生活文化と住環と一緒にオムニバスでやっているんですけど、生活文化の先生はグローバル社会を扱っていて、国際関係とか日本人と外国人の問題とかを扱うようにしています。あまりにも奈良女の学生たちは外に目が向いてないと思い、これは外に目を向けるような授業をやった方がいいなと思ったんです。」

■ 奈良女生よ、外へ出よう

——イングリッシュ・カフェは、外に目を向けさせたいという趣旨で先生が始められたんですか？

「日常的に英語をしゃべる環境がないと思っていたんです。外国人の先生もいらっしゃるけど、その先生たちと普段でも接触がほとんどないというのが不思議で。」

——そのあたりを含めて、ゼミの学生を見て、奈良女の学生の学び方で、もうちょっとこうしたらとか、物足りないとい

うことはありますか。

「たしかに物足りないですね。既存のものを疑わないですね。世の中で一般的にいわれていることをそのまま信じているし、それに対して楯突くようなことはいわない。アジアなど外国へ行って半年間遊んでできますという学生もいないし、突拍子もないことをしてきたバックグラウンドをもった学生もいない。医学部にいくと案外、そういう学生はいるんですね。そういう点ではバリエーションがないですね。多分、きちり育てられているから、いい面と、逆におとなしく育ってしまっているという面と。外にもっと向けさせるようにすれば、もうちょっと出ていこうとするのかなと思います。」

——そのへんをゆさぶって外に向けさせる仕組みってないでしょうか。

「教員の話をお聴くだけでも刺激にはなりますよね。学生の中には、お母さんは専業主婦で、自分もそういう家庭を築こうと思って早く主婦になりたいと、奈良女の旧家政学部に入ってきたんだけど、入って見たらジェンダーの話ばかり聴かされて、違う考え方があるということを知って方向を変えた、といっている人もいます。その意味では、最初は何の疑いも持たずに入ってきているけど、違う考え方を知ること、彼女たちなりにいろんな刺激を受けているんだと思うんですね。」

■ 全体の見取り図が必要

——昔は好きな科目は勝手に勉強して、という感じで、そこそこ単位をとれましたね。今はそんなに制度的な縛りが強くないにもかかわらず、学生は単位をとらなきゃという思い込みが変に強くなっていて、自分が何を学びたいかではなく、単位のとりやすさで科目を選びがちです。

「そうですね。特に語学などは、前の大学でイギリス人の語学の先生が、「全体の見取り図を持って誰かが全体を統括する必要がある。システムティックにやっていく必要がある」といわれていました。準備さえしっかりしていれば、授業に入ってから苦労しない。準備が重要なんだ、と。日本の教育は準備段階の全体の見取り図に時間をかけていないんですかね。」

——個々の先生は準備しますが、確かに奈良女の教養教育の全体のデザインはないですね。

「語学は系統立ってやっていく必要があるかもしれないですね。他の科目もそうすべきなのかもしれないですけど、それをやるとなると、私たちの手間がかかりま

すね。特に責任者になった人は。」

——ある程度集中して専門的に考える人間は大学にとって必要ですよ。それをどういう形でつくるか。担当者を特化してしまうと、かつての教養部の再来にしかならないから、うまくローテーションで、ただし、嫌々ではなく、一定期間は集中して考えてもらって、また交代していくシステムをつくれないうか、ということ、実は今、考えています。

「たとえばモナッシュ大学などは、オーストラリアだけではなくマレーシア校・南アフリカ校とかがあって、シラバスは共通らしいんですね。シラバスをオーストラリアに送ってチェックを受けて許可を得る、ということらしいです。海外の大学に視察に行くとか、どうなんでしょうか。その分野のカリキュラムの標準化ということは考えなくていいんでしょうかね。」

■ 世界への情報発信にスペシャリストを

——そこが大学論の問題になるんですけど、ヨーロッパの伝統的な大学システムは、標準化と相容れないところがあると思うんですね。中世以来のファカルティが自律的にあって。シラバスを標準化するのアメリカの大学のやり方で、そちらが世界標準になりつつあるようには思うんですが。日本はドイツの影響が強かったし、教授会のシステムもそういう伝統があったところへ、戦後、アメリカ型のシステムが入ってきて、どうも悪いところだけ接合したような印象が私にはあります。

「実質的にそうなるかどうかわかりませんが、EUだと大学入試で、ドイツで落ちたから次にハンガリーに行くとか、EUの中で自由に大学を選べるようになっていくようなんですね。その中で学生が移動している。これからはアジアの中でも、偏差値がこれくらいだったら、あなたはシンガポール大学に入れるとか、そうやっていく可能性もありますね。」

——それこそ9月入学論になってきますよね。そうすると語学が不可欠になります。

「日本はハンディになりますね。」

——英語での大学教育が標準にならないと、その中に入れないうですね。取り残されるという焦りはあると思いますが、議論の分かれるところですね。世界標準でやっていかないとだめだという人と、逆に東南アジアの大学がアメリカのシステムに組み込まれていくことは、自前でそれだけの文化を維持できないから、そうなるのであって、日本はガラパゴス化かもしれないけど、1億人規模の文化があって、ある分野を勉強しようと思ったら日本語の文献だけで勉強できてしまう

いう、グローバル化からみたらマイナスではあるけど、逆にいうと、それだけ文化の厚みがあるということを尊重すべきだという議論がありますね。

「ありますね。でも、奈良は万葉とか日本の古いことをやっていて、価値があるとすれば、それを英語で発信しないと、あっても存在が認められない状態ですよ。英語をネイティブでやってくれる人を雇えないのかなと思います。外国人の人材でほぼバイリンガルの人で、

正規の職を望んでいる人が結構いると思うんですね。そういう人を各学部になんか一人は雇ったらいいい。研究しながら奈良女からの国際的な発信を担ってもらおう。今、いろんな大学にそういう人がいるじゃないですか。奈良こそ、そういうことをしたら世界的に価値が知られると思うんですけどね。」

(5月9日、インタビュアー：西村、保田)

インタビューシリーズ第12回：文学部 寺岡伸悟先生

寺岡先生のご専門は社会学で、文学部人文社会学科の文化メディア学コースをご担当。文学部の「なら学プロジェクト」の中心メンバーの一人として、「なら学概論」の授業や、好評の『大学的奈良ガイド』出版の世話役でもいらっしゃいます。「〇〇社会学」といった枠組みにとらわれず、フィールドに根ざして新しいことに取り組むのがご自身の研究スタイルとか。「なら学概論」での学生たちの様子というところからお話は始まりました。



■ 学術的な概論の「一歩手前」

「最近、偏差値の高い大学の学生でも学問の体系にすっと入っていけないところがあるのかな、と思います。学術的な概論の一歩手前に、もうワンステップが必要になってきているのかな、と感じますね。「なら学概論」はリレー講義で、いろんな専門の先生にやっています。たとえばそのときに「社会学の観点から奈良を教えます」というと、既に社会学の中に入っちゃっていますよね。これを「社会学という学問があって、奈良を社会学というものから見ることもできるんだよ」というところから行くと、内容としては同じことをやっても、学生はスッと入って行けるというか、学生の乗ってきかたが全然違うように思います。学問の体系から、わざと一瞬外に出てやって、学生の目線に近いところに行っている、ということかな。つまり「学問の世界というのがあるよね」、「いろんな見方からなっているよね」というところから始めるんです。この、ちょっと一歩引いて「そういう学問があるよね」というのは、教養的な立ち位置なんじゃないかと思っています。なら学に限らず、概論の1回目の最初の10分間にそれがあるとないでは、学生の気分がずいぶん違うのではないかと感じますね。」

「そうしないと、学生は生真面目なので、黒板に書かれたことはノートをとって覚えなさいといかない、出された資料は全部読まないといかないとまず思ってしまう。それで引いちゃうんです。たとえば、門外漢ですが、歴史学だと文書史料とかでできますよね。そのときに、「歴史学は専門に入ったらこういう文書も読めるようになっていく分野なんですよ」という感じでいけば、学生も90分を十分楽しんでくれると思うし、一方でそれを勉強する大変さもなんとなくわかるでしょう。こう

して、自分の興味とそれぞれの学問との「距離感」を測れると思うんです。」

——さまざまなディシプリンとの距離感というのは、教養を考える上で重要ですね。

「「なら学概論」という概論科目ですけど、いわば教養科目ですからね。一般に教員は学問の体系を教えようと思っちゃうけど、「なら学」では、むしろ学生にそれぞれの学問分野との「距離感」を感じとってもらえれば、一応成功ということではないかと思えます。」

■ 専門教育の入口としての教養教育

「「なら学概論」には二つの狙いがあります。一つは1回生に奈良を知ってもらおうという狙い。もう一つは「学問案内」という狙いです。リレー講義の教員には歴史学の人もいれば、地理学の人、美術史学の人もいる。もし、専門という切り口が別で、さらに扱う対象も別だったら、バラバラでディシプリンの比較が難しいでしょう。そこで、あえて対象を「奈良」に束ねることで、学問の違いを知ってもらえるのではないかと考えています。教養教育でありながら専門のアプローチの違いを体感できる。そうあればいいな、という思いなんです。」

——「なら学概論」は、専門の入口であると同時に教養でもあるということですね。『大学的奈良ガイド』も、「奈良」がさまざまな学問領域に共通のプラットフォームになって、そこから各専門が見えてくるという、うまい仕掛けになっていますね。楽しい本です。あれだけたくさん先生の執筆なさっているのはコーディネーターのお力だと思いました。

「ありがとうございます。実はこれがモデルになって、各地の『大学的〇〇ガイド』が次々と出ているんです。広島、滋賀、山口、福岡がすでに出版され、さらに他地域も計画中だそうです。地域をテーマにした大学での学際的な授業や研究の一つのモデルになってくれたらいいなと、『奈良ガイド』の場合には、人文社会科学の執筆者の皆さんが積極的に協力して下さったおかげですね。頭が下がります、うちの学科の先生方には。」

■ 「奈良」という仕掛けと複合的な取り組み

——協力を得る秘訣は何かありますか？これから学内でコラボレーションして新たな教養科目をつくっていくことを考えているので、その絶好のモデルとしてお話を伺いたいと思っただけです。

「リレー講義という、それぞれの先生が、自分の担当分の話をして終わっちゃうということもありえるかもしれません。それとは、ちょっと違うものにしたいたいということがあったんです。そこで、ただ授業をお願いするだけではなく、授業以外に、『大学的奈良ガイド』のような本をつくったり、「なら学談話会」や公開研究会でお話していただいたりしよう。一時、ホームページにエッセイを順番で書いていただいていたんですが、それが、そのまま本の一部になっているということもあります。こんな風にいると、ご無理にならない範囲で、忘れられない範囲でお願いしている感じです。そうやって複合的に取り組んできた中で、共通の理解ができてきたんだと思います。「なら学はこんな感じだよ。世話人たちが一生懸命やっているんだから、頼まれたら加勢してやらないとな」という雰囲気はできているのかな。いろんなことをやってくる中で、イメージが共有されてきたのかなと思います。」

——大学全体として教養教育を考える時も、「なら学」的なものを教養科目として立てられないかと思うのですが、皆さんお忙しいですから、お願いすると結局、プラスαの仕事になってしまいますので…。どういう仕組みにしたらいいかなと思っております。

「『なら学概論』は火曜日の9・10限目にやっていますが、この時間を見つけるのにずいぶん苦労しました。ある先生は時間が合わない、ある先生は非常勤に出ておられる。学生にしても、1限目は必修の英語があるから開講しても誰も受けにこない、というように、1年目にやる時はお先真っ暗というか…。今はなんとか、火曜日の9・10限目が最大公約数的に大丈夫というのがわかって、「ここに非常勤を入れんといってください」とか(笑)、いろいろとお願いしています。ギリギリですよ、こういうのをやるのって。ギリギリですわ、ほんま。どうしたらいいでしょう。」

——苦しいところですね。ただ、「なら学概論」で話すというのは、教員にとっても貴重な体験ですよ。自分の専門から外に出てみるという。

「ええ。そこまでは僕も、きちっと話をしたことはないんですが、皆さん、わかってくさっています。始めは、「専門以外のことはしゃべれない」とお考えになるんです。そう考えるのは自然なことだと思います。ただ、なら学の場合は、専門以外のことをしゃべっていただく必要はなくて、専門からちょっと外に出たスタンスで、専門のことをしゃべってもらえたらいいんです。でも実は、先生方の中には、この機会に「奈良」を新たな研究対象に加えてくださる方もいらして、「こんな機会がなかったら、調べることもなかったら、お話をいただけて楽しかったですよ」と喜んでもらえる場合もあります。それはうれしいですね。」

■ 「ディシプリン系」と「スタディーズ系」

「私自身、新しいことをやってみるのが好きで、ディシプリンから出るのも好きなんです。専門は社会学なんですけど、あまりこだわりはないんです。学部の僕の担当科目に「〇〇社会学」という授業は一つもないんです。」

——今の先生の研究スタイルは、研究者としてのキャリアの中で、どういうところからできてきたという感じですか。

「最初からそんな感じだったんです。学部は社会学のコースに行きましたけど、在日コリアンの生活文化の研究とかしたいと思っていたら、教室の先生に、「それなら東南アジア研究センターに行きなさい」と言われて、一人でテクテク歩いて行って、その先生にエスニシティの理論を教えてもらったりして。社会学だけではなく、文化人類学とか民俗学とか境界領域のところまでふらふら仕事をしてきた人間です。」

「それから、ディシプリン系とスタディーズ系という言い方をされる方がいますね。たとえば「地域研究」というのもスタディーズ系ですね。研究者のなかには、スタディーズ系を低く見ておられる方がいらっしゃるのかなと思う時があるんですよ。混合的で専門性に欠けると。どっちかというスタディーズ系の方でやってきた人間としては、領域をクロスオーバーした方が最終的にディシプリンの価値もよくわかると思うんですよ。学んだり、教えたりする順番の違いだけかな。ディシプリン系の方は、まず概論や原論からガチッと行って、それを学んでから応用をなささいと言う。頭のいい人なら、今はつまなくても将来役に立つんだと、それで我慢してやっていけるかもしれません。でも一方で、知りたいと思っていることや実際の現象に

パーッと行ってしまう人もいますね。そして、そうやって行ったら成果が出るのが早い部分もあるんです。楽しくてネットワークも広がるし、研究者としての幅もひろがる。でも、さらに関心が深まってくると行き詰まる部分もあると思うんですよ。絶対、それは。たとえば、今までいろんな現象を追っかけてきているけど、結局同じことの繰り返しじゃないのか、とかいろいろ思い始める。そうなるのは何故かと、そんなふうに問いが抽象化する。そうするとあらためて理論や古典を読もうかな、となると思うんです。」

■ あえて、読ませない

——今のお話と、最初の概論のお話につながったのですが、奈良女の学生には、ディシプリンから入っても大丈夫な学生もいるけど、それにしても一度、「お勉強癖」を外してやりたい、という感じもありますよね。

「ディシプリンは大事やと思いますけど、入口としては、その時その時の学生の関心から入る。そして、早く行き詰まらせるのが、彼女たちにとっていい勉強になるのではないかと思いますね。演習とかでは、ミーハーなことを研究テーマにしたがる学生が結構いるんですよ。そんな場合は、とにかくやらせちゃうんです。すごいね、やってみてってどんどんやらせるんです。すると、結局知っていることしか出てこないから、学生本人も、やがては「それでどうなの？」となってくる。調査にしても、はじめは思いつきだけの計画性のない調査なども一度やらせてみることもあります。そうすると結局何もわからないということが本人もわかるんです。こうなると、もうちょっと話が深まっていく。だからとにかくやらせる、そういう指導をする場合が多いです。奈良女の学生さんには難しい本を読める能力があるんだから、まず読ませてしまうというやり方もある。だけど、いざとなったら読めるんだから、とりあえず読ませずに、ちょっと枠を外して面白いと思うことをやらせて、あえて行き詰らせてみるというやり方もある。そうすると、そこを突破してすごいものが出てくることもあるんです。もしだめだったら、読めといえれば読める学生たちだから、そこで読ませたらいいんじゃないか、と思っているんですけどね。」

■ 「審美的」リテラシー

——文化メディアの学生を見ていて、彼女たちに今必要な教養をどのように考えていらっしゃいますか。

「文化メディアというコースの観点からいうと、審美的な価値観、理論、技術を教える授業が少なすぎるように感じています。デザインに関する授業も少ないと思います。文化メディア学コースに限らず、文学部ではデザインは必修にしてもいいくらい大事だと思います。文化メディアのコースを出ているにもかかわらず、美的なデザインの基礎を知らないことや、ちょっとしたスケッチもできないことは、僕としてはまずいと思っています。うまく描けるかということではなく、色や文字の配列やバランス、フォントの種類といったもので、世の中がどれだけ動かされるかを意識できることが大事だと思うのです。例えば瀬戸内海の直島のアートによる動きを見てもわかるように、アートが持っている社会的な力はすごいものがある。だから、文学部の学生にはアートやデザインに対するリテラシーを身につけてほしいですね。」

「これは、単一の専門に特化して学科や学部を構成することへの懸念でもあるんです。同じ専門の教員をたくさん集めるのが良くないということではありませんが、いろんな学問に触れられる場所であることが大事だと思います。そうしたなかで、文学部としては、美的感性とか、何かを表現できる多少の技術とかを少しでも教えてあげられたら、現代社会における文学部の意義を出せるんじゃないか。そうしたら、就職した時に、やっぱり文学部出身者は違うよね、とかならないかな、と思うんです。」

——それは面白い観点ですね。リベラルアーツの歴史を考えると、もともと審美的な要素が重要だったわけですし…。現在考えているのは、教養科目を全部一度見直して、今必要なものを洗い出すこと。そして、カテゴリーそのものをなくして、専門と結びつく形で有機的に科目を組めないかということですね。その際、審美性というのはとても大事ですね。

「それは、文学部の卒業生に身につけさせてあげたい特性の一つですね。」

——ありがとうございます。教養教育改革のよいヒントをいただきました。

(2012年5月16日 インタビューア：西村、辻)

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 22 ■

2012年6月30日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL：0742-20-3352

Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/

mail：crades@cc.nara-wu.ac.jp